

聖心の教育と個性尊重

聖心女子大学副学長（評価・大学院担当） 北村和夫

私が聖心女子大学に勤め始めた三十六年前、多くのことが驚きであった。自己主張が強く自信家の男性が大半であったそれまでの環境と比べると、女子大生の譲り合いの精神や謙虚、謙遜といった気風が目につき、戸惑いを感じたものである。要するに自己伸長ばかりを追い求めてきたからであろう。

そんな夏の夜、仕事をしていると当時のシスター内山学長が冷やした葡萄を差し入れて下さり、先輩教員と三人、歓談に及んだことがある。前述の戸惑いを笑いながら話し、実は幼稚園では「トットちゃん先生」で知られる小林宗作先生に育てていただき、小学校から高校までは大正新教育の流れを汲む成蹊学園で学んだこと、研究テーマも大正新教育史研究であることを話した。これは、大正デモクラシー期のリベラリズムを背景に、子どもの個性、自発性の発揮を追究した経験主義的な教育運動である。

「新教育の個性尊重と聖心の教育とでは相性が悪いのでしょうか。」

と素朴な疑問を投げかけるとシスターは即座に、そんなことはありません、聖心では個性尊重という言葉の方はあまりしてこなかったけれど、一人ひとりの生徒をかけがえのない存在として愛し大切に育て

てきました、日本での設立時期も近いことですから必ずつながりがありますよ、とお答えになり、ぜひ両方をつなげて下さい、と励ましていただいたことを覚えている。新教育の持つ個人主義的な人間観とキリスト教とのつながりを思想的に確認することは可能であろうが、教育の具体的な方針や、子どもの中に育成される資質・能力としてはどうだろうか。一つの「宿題」を頂戴した思いを抱いた。

その後、「大学の理念」の制定（一九九六年）、『聖心女子大学1916～1948～1998』の編纂（一九九八年）に関わらせていただいたことは幸運だった。聖心生は謙虚なだけではなく愛されて育つだけでもない。その人間的にゆたかな自己をもって社会にかかわり、各自の生きる場に灯火を掲げる存在であってほしい、ここに聖心の存在意義もある、と考えるようになったのである。

さて、二〇一七年には、大正新教育の中心的存在であった成城学園が開催した創設百周年記念シンポジウムにて基調講演をさせていただいた。その終盤、個性尊重の理念はいま、どう捉えるべきなのか、とフロアより質問があった。私の答えはこうである。近年の教育改革は個性重視を謳い、言葉の上では全国に浸透している。しかし実態として、偏差値、不登校、いじめの横行する中で、日本の子どもは自己肯定感や自尊感情を持っていないのではないか。個性尊重は、優れた個人の能力才能を伸ばすだけでなく、一人ひとりをかけがえのない存在として受け止め、愛する深さがあつてこそ生きてくる。そして、個性尊重は自己の個性ばかりでなく、異質な他者の個性を尊重してこそ本物となる。自他の協働により、平和な世界を築くことがグローバル化する現代の個性尊重であろう。——シスターからいただいた「宿題」がここには微妙に響いている。